社会生活力を育む授業づくり
－自分の力を十分に発揮していくための支援を通して－

最上一郎*・田淵　健*・藤原有紀*・立原幸枝*・渡辺由香*
我妻則明**・鎌田文聰**・宮﨑　眞**・名古屋恒彦**・田代高章**
（2009年３月４日受理）

Ichiro MOGAMI, Ken TABUCHI, Yuki FUJIWARA
Yukie TACHIHARA, Yuka WATANABE
Noriaki AZUMA, Fumisato KAMADA, Makoto MIYAZAKI
Tsunehiko NAGOYA and Takaaki TASHIRO

Conducting Classes to Cultivate the Strength of Social Life
－Through Support to Augment their Own Strengths－

Ⅰ　はじめに

本校では、2003（平成15）年度より「社会生活力」をキーワードとした実践研究に取り組んできた。2005（平成17）年度からの３年間はさらに「エンパワメント」というキーワードを加え、児童生徒を取り巻く教育環境と支援体制の整備を図ることで社会生活力を育む実践を行ってきた。

研究の成果として、個々の力を最大限発揮していくための環境づくりと支援の展開という本校としてのエンパワメントのとらえを明確にすることができた。また、エンパワメントを生かした授業づくりの視点を明らかにし、児童生徒の社会生活力の育みにつなげることができた。今後の課題としては、さらにより良い環境づくりの在り方を見直し、改善していきながら授業実践を積み重ねていく必要があることが明らかになった[1)]。

このような本校研究の経緯を受けながら、2008（平成20）年度から２年次研究で取り組む新たな研究主題を設定するに当たり、「学校教育目標」「前次研究の成果と課題」「各学部（小学部・中学部・高等部）からの研究主題への意見」の３つの観点を基に、検討を進めた。その結果、新研究主題のキーワードとして、「社会生活力」「教育環境の整備」「支援方法」「主体性」「授業実践」が出され、前次研究を継続し、発展を図っていく必要があることを確認した。

そこで、前次研究の流れを受け、児童生徒が自分の力を十分に発揮して主体的に活動するために、児童生徒を取り巻く環境を整えながら授業づくりを行うことで、社会生活力を育みたいと考え、本研究主題を設定した。

Ⅱ　研究計画

１　研究の目的

社会生活力のとらえを明確にし、児童生徒が自分の力を十分に発揮して主体的に活動できるように、児童生徒を取り巻く環境を整えながら授業づくりを行い、授業実践の積み重ねを通して、社会

＊岩手大学教育学部附属特別支援学校　　＊＊岩手大学教育学部

生活力を育んでいく。

2　研究の仮説

児童生徒が自分の力を十分に発揮して主体的に活動できるように、児童生徒を取り巻く環境を整えながら授業づくりを行い、授業実践を積み重ねることで、社会生活力を育むことができるであろう。

3　研究内容及び方法

⑴　社会生活力のとらえを再検討し、明らかにする。

⑵　社会生活力を育むための授業づくりについて検討し、その在り方を明らかにする。

⑶　授業づくりの流れに基づき、授業実践を積み重ねる。

⑷　社会生活力の育みの評価を行い、支援の在り方をまとめる。

4　研究の年次計画

以下の表１は、２年次の研究計画を整理したものである。

表１　研究の年次計画

○平成２０年度（１年次） １　社会生活力のとらえの再検討 ・各学部ごとのつながりを意識しながら、各学部で再検討をする。 ２　社会生活力を育むための授業づくりの在り方の検討 ・授業づくりの内容や方法について検討する。 ３　社会生活力を育むための授業づくりに基づく授業実践 ・社会生活力を育むための授業づくりに取り組み、支援等を検討しながら授業実践を積み重ねていく。
○平成２１年度（２年次） １　社会生活力を育むための授業づくりの確認 ・授業づくりの内容や方法について再確認する。 ２　社会生活力を育むための授業づくりに基づく授業実践 ・支援等を検討しながら授業実践を積み重ねていく。 ３　研究のまとめ ・研究の成果と課題をまとめる。

Ⅲ　研究の実際

1　本校における社会生活力のとらえ

⑴　学校全体の社会生活力のとらえ

本研究における学校全体としての「社会生活力」のとらえについては、前次研究のとらえをもとに、特にも学校教育目標とのつながりを大事にしながら以下のようにとらえることとした。

> 「社会生活」において、一人一人が最も豊かな社会参加を実現していくために、自分の力を十分に発揮し、主体的に生きていく力。

・「社会生活」とは、家族や地域、学校や施設、共同体や自治体、会社や企業等、様々なレベルでの社会を指す。

・「最も豊かな社会参加」とは、今現在及び将来を含めたそれぞれの生活において、自らの人生を主体的に生き、心が満たされるような社会生活ができることと考える。

・「自分の力を十分に発揮し、主体的に生きていく力」とは、適切な支援のもと、今もっている力を十分に発揮し行動しながら、生き生きと生活していく力と考える。

⑵　各学部の社会生活力のとらえ

各学部でも前次研究におけるとらえや学部目標等を参考にしながら、児童生徒の様子をもとに、とらえを設定した。

表２　各学部の社会生活力のとらえ

学部	社会生活力のとらえ
小学部	人とかかわり、生き生きと意欲的に活動し、自分から進んで活動する力
中学部	人とかかわりながら、自立的に活動する力
高等部	自分の思いや願いをもち、自立的に生活する力

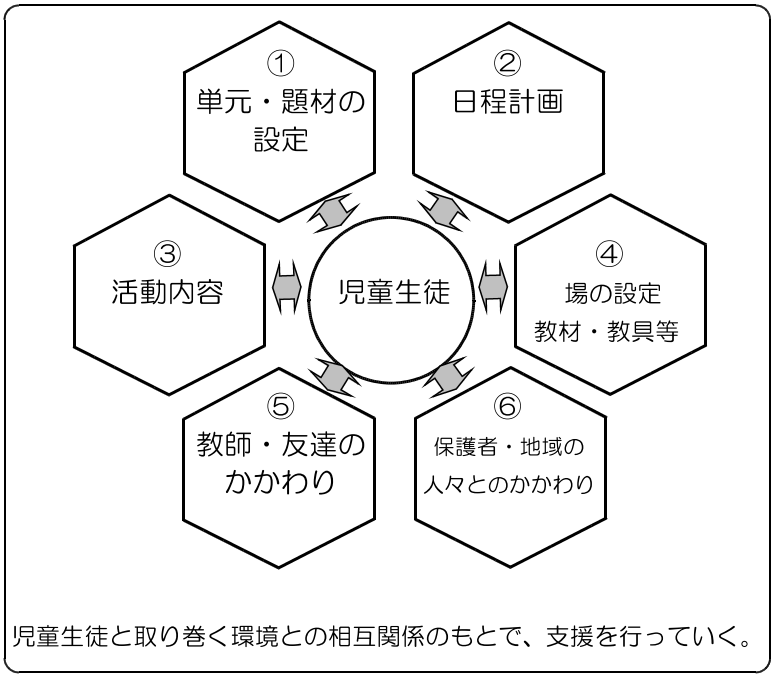
２　社会生活力を育む授業づくり

「学習指導要領解説各教科、道徳、特別活動編－2000（平成12）年３月－」[2)]に知的障がいのある子どもの教育的対応の基本が、表３のように示されている。この９点に整理された教育的対応の基本を見ると、授業づくりを進めるにおいて、子どもの主体的な活動を支えることの重要性やその要点が記載されている。

表３　知的障がいのある子どもの教育的対応の基本

①　児童生徒の実態等に即した指導内容を選択・組織する。
②　児童生徒の実態等に即した規則的でまとまりのある学校生活が送れるようにする。
③　社会生活能力の育成を教育の中心的な目標とし、身辺生活・社会生活に必要な知識、技術及び態度が身に付くように指導する。
④　職業教育を重視し、将来の生活に必要な基礎的な知識や技能が育つようにする。
⑤　生活に結びついた実際的で具体的な活動を学習活動の中心にすえ、実際的な状況下で指導する。
⑥　生活の課題に沿った多様な生活経験を通して、日々の生活の質が高まるように指導する。
⑦　教材・教具等を児童生徒の興味・関心を引くものにし、目的が達成しやすいように段階的な指導を工夫するなどして、学習活動への意欲が育つように指導する。
⑧　できる限り成功経験を多くすると共に、自発的・自主的活動を大切にし、主体的活動を助長する。
⑨　児童生徒一人ひとりが集団の中で役割を得て、その活動を遂行できるように工夫すると共に、発達の不均衡な面や障害への個別的な対応を徹底する。

本研究では、上記の知的障がいのある子どもの教育的対応の基本を参考にすると共に、前次研究の流れを受け、「児童生徒が自分の力を十分に発揮し、主体的に活動する授業づくり」を目指していく。そのための手立てとして、児童生徒を取り巻く環境を整えていくという考えのもとに授業づくりを進めていく。ここでいう環境とは、「児童生徒が学習活動を行う上でかかわり合うもの及び児童生徒の周辺を取り巻くもの」ととらえた。具体的には、図１にある「単元・題材の設定」、「日程計画」、「活動内容」、「活動の場、教材・教具」、「教師・友達のかかわり」「保護者・地域の人々」の６つの観点を指す。環境を整えていくに当たっては、学習の主体者である児童生徒の側に立って行い、活動の様子を確かめながら見直しを図っていく。常に、児童生徒と環境との相互関係を意識しながら支援を行っていくこととした。



自分の力を十分に発揮し、主体的に活動できる授業

①単元・題材の設定（設定理由の明確化）
- 興味関心を生かした単元・題材の設定。
- 生活に結びついた実際的な単元・題材の設定など。

②日程計画（日数、時間、主な活動内容）
- 主体的に活動に取り組める期間や時間、活動内容の設定。

③活動内容（個々の具体的な活動内容や活動量、グループ編成等）
- 一人一人の活動内容を明確化。
- 活動量や活動時間、グループ編成などを適切に設定。
- 自分の力を十分に発揮し、主体的に取り組める活動を設定。

④場の設定、教材・教具等
- 場の設定の工夫。
- 教材教具の工夫。

⑤教師・友達のかかわり
- 教師のかかわり方の工夫。
- 友達同士のかかわり方の工夫。

⑥保護者・地域の人々とのかかわり（関係機関等との連携を含む）
- 保護者との連携の工夫。
- 支援にかかわる共通理解を図るための地域の人々や関係機関等との連携。
- 児童生徒が地域の人々や関係機関等の方々とかかわる際の支援。

図１　授業づくりにおける６つの観点

社会生活力の育みに関する評価については、各学部ごとに評価の観点を設定し、観点として書かれてある児童生徒の姿が多く見られたことを育みととらえる。また、個別の指導計画と単元及び題材指導計画等を活用し、文章表現による評価、目標に即した評価、支援と結びついた評価を行っていくこととした。表４は中学部における評価の観点である。

表４　中学部における評価の観点

自立的に活動する	・活動に興味関心をもって、自分から進んで行動する。 ・活動に見通しをもち、自分なりに気付き、考えながら行動する。 ・活動の目的や役割を理解し（感じ）、最後までやりとげる。 ・状況を把握し、適切に行動する。 ・自分のもっている力を活かして活動する。 ・自己選択・自己決定を行い、実行する。 ・各種の施設、機関に興味・関心をもち、積極的に活用する。 ・ルールやマナーを意識し、状況に応じた行動をする。 ・物、道具、情報を有効に活用している。
人とかかわる	・仲間と共に活動する。 ・相手からの情報を理解して行動する。 ・自分の思いや考えを適切な表現で伝える。 ・仲間の様子を意識して行動する。 ・自分の思ったことを相手に伝えようとする。 ・自分からあいさつしたり話しかけたりする ・達成感などを仲間と共有できる。

３　授業実践例

【実践例１】小学部遊びの指導「風とあそぼう」

⑴　授業について

①　題材について

本題材は、小学部すみれ組（３年生３名、４年生３名、計６名）の児童が、身近にある風という現象を感じながら、楽しく遊ぶ題材である。児童は、これまで歌遊びなどでくしゃみを表現する手段として扇いだり、夏祭りの単元で大きな風を感じて遊んだりして、自分で風を作る楽しさも何度か経験している。今回は、これまでの経験を発展させ、友達とかかわって遊ぶ楽しさや、工作的活動を通して風をもとにして遊ぶ教材を作るなど、児童の興味・関心を生かしながら遊びを展開した。

写真１と写真２は、風を感じながら楽しく遊ぶ児童の様子である。

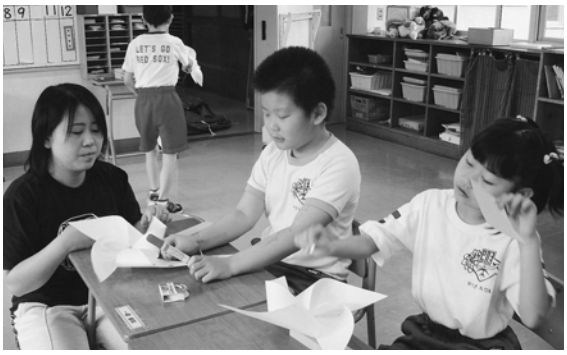


写真１　かざぐるまを製作する様子

写真２　扇風機の風で遊ぶ様子

②　支援について

・本題材の始めの数時間は、一人一人の興味・関心を丁寧に育むために教室で、あるいは少人数で一種類ずつの活動に取り組んだ。

・一人一人の児童が、それぞれ生き生きと楽しめる内容や教材を確かめ、また楽しそうに遊ぶ友達を見ることで、他の児童にも興味が広がるようにした。

・創作活動を通して作った児童による手づくり教材での遊びでは、教師や友達と役割を交代しながら、かかわりあって遊びを展開していけるようにした。

・題材の後半では、取り組んだ活動を複数提示したり、組み合わせたりしながら、広い空間でダイナミックに遊びを展開したり、お互いの遊び方を見合ったりして、次第に遊びが広がっていけるようにした。

・積極的に新しい遊びに入っていけない児童がいても、教師が楽しく遊んで見せることでその遊び方に徐々に興味を示すような展開を考えた。

・遊びの展開においては、一つの活動に夢中になって取り組む事を大切にしながらも全体の活動の流れの中で、静かな空気の動きやダイナミックな遊びを交互に楽しめるよう、声掛け支援や教材の提示で、時間的に静と動のメリハリをつけるように工夫した。

⑵　授業づくりにかかわる評価について

表５は授業づくりにかかわる評価についてまとめたものである。

表５　小学部の授業づくりにかかわる評価

項　目	評　価
①単元・題材の設定	・季節に合った題材であった。 ・目に見えない素材であったため題材としては難しかったが、互いに風を送り合うなど社会生活力を育むには良い素材だった。
②日程計画	・ダイナミックな活動として、第３次に外で風を感じる活動があると良かった。当時は情緒の不安定な児童がおり、一緒に活動できるか、安全面で十分な配慮ができるかに不安があり計画しなかった。 ・プールの始まった時期と重なり、そちらに気持ちが傾いている児童が多かった。
③活動内容	・今回、活動の始めには製作活動を取り入れたが、始めから自由に思い切り遊ぶ中で、こちらも一緒に遊んだり、遊びを教師がやってみせるという方法もあった。
④場の設定 教材・教具	・「風」での遊び方に差があったので、教材づくりや準備が難しかった。 ・遊び道具を自分で作る活動は、子どもの興味・関心を生かした導入であった。
⑤教師・友達のかかわり	・「思い切り遊ぶ中で自然に社会生活力を育む」には、長いスパンで考えないと育たないのではないか。例えば、「ままごと」のように、役割をもって遊ぶ題材であれば育つのか？
⑥保護者・地域の人々とのかかわり	・今回の題材では、設定しなかった。

⑶　成果と課題

①　成果

・活動の流れを同じにして繰り返すことで、見通しをもって取り組むことができ、主体的な姿が見られた。

・「人とのかかわり」では、人と接触するだけではなく、友達の様子を見ていたり、真似をしてみることも「人とのかかわり」ととらえたい。同じ場を共有するということも大切である。

・「遊びの指導」は、活動に対する興味・関心をもちやすい。その中で教師の意図的な活動、人とかかわるきっかけづくりも必要であった。

②　課題

・単発な活動ではなく、年間のテーマをもって長期間取り組み、小さな変化も大切にしていくことが大事。子どもの変化を長いスパンで評価していく必要がある。

・広い場所や大きな遊具を使った活動を展開できる環境を整える必要がある。複数の学級で、ある期間同じ単元や題材にそれぞれ取り組むなど、場を共有してはどうか。

・児童が教師に「してもらう活動」から児童が自ら進んで「する活動」への転換が大切ではないか。

【実践例２】中学部生活単元学習「注文ＯＫ！きれいにしよう中野地区活動センター！！」

⑴　授業について

①　単元について

本単元は、中学部全体で、近隣の中野地区活動センターに花壇を作るために「中花壇グループ」（掘る、土作り、花壇杭設置等）「外花壇グループ」（草取り、剪定、土入れ）「校内土作りグループ」（肥料混合、外花壇杭設置、土入れ）「杭作りグループ」（杭作り、記念碑作り）の４つのグループに分かれて取り組んだ単元である。

今回の花壇作りは、前町内会長さんより注文を受けて活動を行った。昨年度から行っている学校近くの「蝶ヶ森（標高229㍍）」に花壇を作った活動を活かしながら、生徒にとって、より実際的で現実的な、一歩社会に迫った活動として展開した。

単元の期間は14日間で、最終日には地域の方々も招待し、完成パーティーを行った。

写真３と写真４は、花壇作りに取り組む生徒の様子である。

写真３　花壇の杭を設置する様子

写真４　花を植える様子

②支援について

個が十分に力を発揮できる支援を吟味し、共に活動する生徒や教師の姿をも支援として、どの生徒も継続して活動し続けられるようにした。また、学習活動の展開に応じて、活動の質を高められるよう支援をしていくこととした。

⑵　授業づくりにかかわる評価について

表６は４つのグループの中から「中花壇グループ」の授業づくりにかかわる評価についてまとめたものである。

表６　中学部の授業づくりにかかわる評価

項　目	評　価
①単元・題材の設定	・昨年度の蝶ヶ森での花壇作り、今年度の蝶ヶ森の花壇の追加といったこれまでの流れからすると自然なタイミングで本単元を設定することができた。地域から賞賛されたことや、作業の経験を活かして、自信と意欲をもって取り組むことができた単元となった。 ・今回の花壇の設置は、前町内会長さんからの推薦と活動センターからの依頼により行うこととした活動である。地域との本当のつながり、関係の深まりが感じられる。頼まれたことに応えるということが本物の活動としての意識の高まりにつながった。 ・活動センターは地域の方が集う公共の施設であり、また、通りに面した場所でもあったため、地域の方々とは日常的にあいさつを交わしたり、労いの声を掛けられるなど、直接人とかかわる場面が自然に見られる活動となった。
②日程計画	・実際の活動からパーティーの準備、完成式までを含めた日程計画により、見通しをもって取り組むことができた。 ・作業エリアが広く、仕事量も多かったが、どのグループも丁度良いペースで仕事を終えることができた（グループ編成が適切であった）。
③活動内容	・規模の大きな活動であり、存分に取り組める活動量が豊富であった。 ・生活単元学習や作業学習といったこれまでの経験を生かすことで、自信をもった取り組みにつながり、意欲的に3週間継続できた。 ・それぞれの生徒に対して自分たちのできること、十分な活動量を用意することができたので、めいっぱいの活動につながった。 ・仕事の方法等について自分で考える、選ぶという自己選択の場面も見られた。また、効率的な方法を見出していた。スコップの持ち方、ふるいの使い方など、教師が示した方法とは異なったが、結果として仕事になっていれば良いものと考えて対応した。 ・グループに分かれての活動であったが、それぞれのグループが作業の性格が異なるものであり、より生徒に合った活動を用意しやすくなっていた。同時にグループごとにまとまりや勢いが感じられた。
④場の設定 教材・教具	・各グループ共、お互いの活動が見えるように場を設定した。また、毎日登っている蝶ヶ森から下りる際に活動センターを経由し、全員で花壇の進捗状況を見るようにしたことでグループ間の活動についてのつながりが意識できた。 ・４つのグループの活動の場が、大きく二つに分かれていたが、仕事の性格上はやむを得ないと思われる（それぞれの場は機能的であった）。しかしながら、今後なるべく一体的な場で同様のクオリティを有する活動を計画することは課題としたい。 ・生徒の様子を見て道具の工夫を行うなど、日々の改善を行ったことが自立的な姿に結びついた。
⑤教師・友達のかかわり	・同じ仕事を担当した生徒同士、お互いを励ましあっていた。また、友達をライバル視してより多く、速くと張り切る生徒もいた。 ・本単元においても、教師が自身の分担仕事に存分に取り組める場面が多く見られた。活動選択、道具等の手立てが行き届いていたためと思われる。 ・共に活動する教師は、生徒に対し、共感的な対応がしやすくなる（共に働く仲間になる）ということがどのグループでも非常に強く感じられた。
⑥保護者・地域の人々とのかかわり	・活動の様子を通信で家庭に伝えたことで家庭でも話題になりテーマを共有できたものと思われる。また、実際に作業の様子の見学や完成式に何人かの保護者が参加したことは良かった。学校での自立的な姿を見てもらうことで、同様のことに家庭でも取り組もうというきっかけにもなると思われる。 ・活動センターの職員の方を始め、ゲートボールを楽しまれているお年寄り、ご近所の方々、町内の役員の方々、市役所の方等、多くの方々と自然な交流が生まれた。自分からあいさつを交わしたり、励ましの言葉をいただいて意欲を増したりできる機会となった。

⑶　成果と課題

①　成果

・公共の場を整備するという地域の方々から注目を集めるような、実際的な活動をテーマにしたことがやりがいとなり、その上で力の発揮を願ったグループ編成及び、個に応じた道具の工夫や場の設定を行った。このことが本単元の期間の生徒の自立的な姿に結びついたものと考えられる。単元として何を設定するのかが重要な支援となることが考察できた。

・中学部研究では、教師や地域の方も「仲間」として広くとらえた。今回、仲間と共に取り組んだ活動においては、ごく自然なかかわりが多く見られ、その中で人とかかわる力の育みがみられた。

②　課題

・途中で活動を変更した生徒があった。活動内容の選定については、本人の願い、保護者や教師の願いをふまえ、力を発揮できる活動が何であるかを多面的に考えていかなければならない。

【実践例３】高等部社会生活学習「カラオケに行こう」

⑴　授業について

①　題材について

本題材は、余暇の過ごし方を視野に入れた活動の選択肢の中から、自分で好きな活動を選び、主体的に楽しみながら余暇の過ごし方を身に付けることをねらいとした題材である。

カラオケという活動を選択した生徒達が、学校にあるカラオケを利用しながら学習を積み重ね、題材の最終日には実際にカラオケ店へ出かけて楽しむ活動である。カラオケ店の利用に際しては、好きな曲を選択することはもちろん、ランチメニューや飲み物を選ぶなど自己選択の機会も多く設定し、予算内での外食や公共の交通機関利用などの学習も併せて行った。

写真５と写真６は、校内でカラオケに取り組んだ時の生徒の様子である。

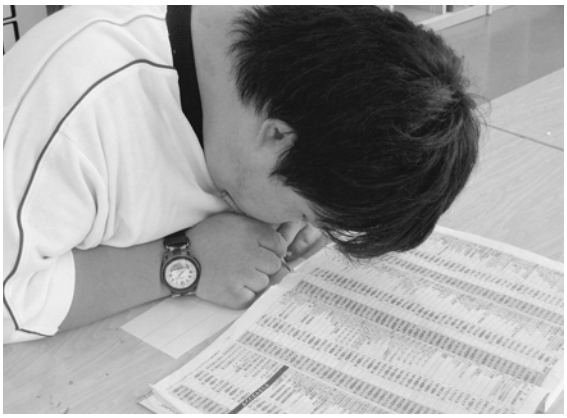


写真５　リクエストカードに記入する様子

写真６　スクリーンを見ながら歌う様子

②　支援について

〈場の設定の工夫〉

・生徒個々の目標に合わせて、生徒同士で活動するグループ、教師の支援を受けながら活動するグループ、教師と一対一で活動するグループを編成し、カラオケ店でも生徒の実態に合わせて活動できるように複数の部屋を予約する。

・カラオケ店は交通の便が良く、バリアフリーの部屋がある店を選択し、繰り返し利用する。

・校内では、実際の活動を想定して、当日活動するグループごとにテーブルを設置したり、受付カウンターを用意したりする。さらに、大画面でよりリアルにカラオケができるように、液晶プロジェクターを設置する。

〈教材・教具の工夫〉

・生徒の歌いたい曲名を一覧にしたリストを生徒個々に用意し、選曲の際に活用する。

・生徒が支援を受けたい時に、その意思を示すためのカードを用意する。

・生徒個々の実態に応じたスケジュール表やルールカードを用意する。

〈働きかけの工夫〉

・教師は生徒の活動を見守りながら、生徒が支援を必要とした時に自分から伝えられるように行動を引き出す。

〈その他〉

・自分で目次本から選曲できない生徒については、事前に家庭に連絡を取り、普段から歌っている歌を聞いておき、実際の選曲の場面での支援に活用する。

・今回利用するカラオケ店には、フロントでの応対の仕方を事前に聞いておき、学校での活動でも店での応対に準じた受付ができるようにする。

・自分でカラオケ店への電話予約をする機会を設け、実際の予約の仕方がわかるようにする。

⑵　授業づくりにかかわる評価について

表７は授業づくりにかかわる評価についてまとめたものである。

⑶　成果と課題

①　成果

・生徒の興味・関心の高い題材の中から、さらに生徒自身が選択した活動を授業に取り入れたことで、生徒は「やりたい」「やってみたい」という思いや願いをもって活動することができた。

・実際の活動では、選曲の仕方など生徒一人一人に合わせた支援や改良を重ねた支援によって、生徒はより積極的に支援を活用するようになったり、自分の力で活動できる部分が増え、自立的に活動することにつながった。

・自分で選曲などの活動ができるようになると、自信がつき、気持ちに余裕が生まれ、友達の歌に関心が向いて、一緒に楽しんだり、周囲の人とのかかわりが徐々に見られるようになった。

②　課題

・カラオケを「人とのかかわり」を含めた余暇活動として、どのように授業に組み入れていくか。

・子どもたちの主体的な生活を考えると、カラオケ本来の楽しみ方として時間帯の設定、機会の設定についてどのように現実度を高めていくか。

・みんなと一緒に活動することや活動そのものへの参加が難しい生徒へのねらいや参加を促すための支援はどうあればよいか。個に応じた支援を考えていかなければならない。

・知っている曲や好きな曲から選ぶこともよいが、新しい曲に出会って子どもたちの世界を広げるきっかけをつくるために、教師等からの働きかけも必要と考える。

Ⅳ．おわりに

本研究は、2008（平成20）年度から2009（平成21）年度までの２年次計画のもと、全校体制で推進されるものである。また、エンパワメント（個々の力を最大限発揮していくための環境づくりと支援の展開）の考えを取り入れ、社会生活力の育みをめざした前次研究の継続、発展を図った研究である。

１年次目である今年度は、学校全体及び各学部ごとに社会生活力のとらえを再検討し、明らかにすることができた。また、社会生活力を育む授業づくりの基本となる考え方、児童生徒を取り巻く環境を整える上での観点、社会生活力の育みに関する評価方法など授業づくりの内容や方法について確認することができた。さらには、授業実践を通して、社会生活力を育む授業づくりの在り方について、検討することができた。

次年度は、さらに授業実践を積み重ねながら、より良い授業づくりの在り方を模索すると共に、児童生徒の社会生活力を育んでいきたい。

表７　高等部の授業づくりにかかわる評価

項　目	評　価
①単元・題材の設定	・生徒の選択した活動を取り入れたことで、「自分で、自分から、自分らしく」活動をすることができた。
②日程計画	・事前学習の中に、実際の活動（カラオケ）を取り入れたことで、生徒達は生き生きと活動することができた。校内でのカラオケを３回行ったことで、「次も歌いたい」と次回の活動への意欲の高まりが感じられた。「カラオケ店では、学校にはない曲を歌いたい」という生徒もいた。
③活動内容	・授業の始まりと終わりを工夫し、カラオケの活動時間を設定したことで、生徒は存分にカラオケを楽しむことができた。 ・カラオケを楽しむことがメインではあるが、外食や公共交通機関、娯楽施設の利用など、生徒のニーズを総合的に盛り込むことができた。 ・生徒は、楽しみながらも必然的に個々の教育的ニーズに応じた活動を取り入れることができた。 ・一斉指導の中でも個々のニーズ（コミュニケーション、受付・会計等）に対応できる内容となった。
④場の設定 教材・教具	・生徒個々のねらいに合わせてグループ分けを行い、事前学習から同じグループに分かれて活動したことは良かった。 ・液晶プロジェクターを使用したことで活動に一体感が生まれ、みんなでカラオケを楽しむことができた。 ・受付手順カードや歌カード、ルールカードは、学校でもカラオケ店でも利用できるものを作成した。また、携帯できるようにコンパクトにし、生徒が使いやすいようにした。実際のカラオケ店でも有効であった。 ・歌カードやリクエストカードは、個々の実態に合わせていくつか作成した。選曲の手掛かりとなり、自分から活動することが増えた。 ・Ｓ・Ｙには、歌う順番を意識できるように、ホワイトボードに生徒の顔写真を順番に貼り付けて示した。活動に見通しをもって順番を守り活動することができた。
⑤教師・友達のかかわり	・お助けカードを用意し、教師の支援を受けたい時に支援を求めやすいようにした。 ・友達が歌っている時に一緒に歌い出したり、リズムを取ったりする姿が見られた。
⑥保護者・地域の人々とのかかわり	・普段、家庭で歌っている歌を目次本のコピーを示してチェックしてもらい、親しんだ曲でカラオケを楽しむことができるようにした。 ・利用するカラオケ店を固定化して繰り返し利用したことで、生徒を理解してもらい、特別扱いすることなく対応していただいた。受付や会計時の対応の仕方を事前に教えていただいたことで、受付手順カードに反映させることができた。

文　献

1）岩手大学教育学部附属特別支援学校（2007）：『研究紀要第19集』
2）文部省（2000）：『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領（平成11年３月）解説－各教科、道徳及び特別活動編－』369－370